



*m i c h i*



10

2023 No. 65

世界救世教 明主様と聖地に直結する会

## 花による天国化運動

本教の目標である地上天国建設というその地上天国とはいかなるものであろうか。いうまでもなく真善美が完全に行われる世界である。勿論本教の生命である健康法も自然農法もその具体化であり、また浄霊法は肉体はもとより精神的改造でもあるが、それとは別に人心を美によって向上させることも緊要である。美については差し当たっていま着手の運びになっている本教の新しい企画である。それについてまず日本の現状を書いてみよう。

美とは大別して耳と眼と舌の領分であるが、耳のほうは今日ほど音楽の盛んな時代はまずあるまい。その原因としては勿論ラジオを第一として蓄音機、録音盤などの発達も与って力ある。ところが眼のほうに至ってはただ演劇・映画等によるだけでまことに心細い状態である。もっと簡単に身近に時間の制限がなく美の感覚に触れるものが欲しいのである。なるほど演劇や映画は眼を楽しませるものとしては上々のものであるが、時間と経済と交通等の制約がある以上全面的に受け入れることはできない。ところが吾らがここに提唱するところのものは美の普遍化に好適である花卉の栽培とその配分である。一般的住宅その他の部屋に花を飾ることである。現在といえども中流以上の家庭には大抵飾られているが、それだけでは物足りない。吾らの狙いはいかなる階級、いかなる場所といえども花あり、誰の眼にも触れるようにすることである。

事務室の隅に書斎の机に一輪の花がいかにか一種清新の潤いを覚えしむるかはここにいう必要はない。理想からいえば留置場、行刑場などにまでも一枝の花を飾りたいのである。そうすれば彼ら犯罪者の心理にいかにか好影響を与えるであろうかである。このように人間のいるところ必ず花ありというような社会になれば、現在の地獄的様相を相当緩和する力となる。

ところがそうするには今日のごとき花の高価ではどうにもならない。どうしても非常なる低価で手に入れるようにしなければならない。それには食糧生産に影響を与えない限り大いに花卉類の増産を図るべきである。これについていま一つの重要事を書いてみよう。

日本は花卉類の種類が多いことは世界一とされている。また栽培法においても世界の最高水準に達しているということで、かのオランダ特産のチューリップなどが今次の戦争前越後地方に栽培され相当の輸出額に上っていたことや、白百合が神奈川県下に生産され英米に輸出し、年々増加しつつあったことなどは人の知るところである。吾らの調査によれば米人などは日本の花卉に憧れ米国にない名花珍種を要望してやまないそうであるから、今後は大々的増産によって外貨獲得の一助たらしめるべきである。ところがこのことは案外今日まで閑却されていたが今後は大いに奨励する必要がある。しかも輸出高に制限の憂いがない貿易品であるによってみても大いに嘱望の価値があろう。

(昭和24年5月8日)



洋人奏楽図屏風 桃山時代（16世紀後期）重要文化財 MOA美術館所蔵

桃山時代、キリスト教の伝来とともに、当時宣教師たちによって運営されたコレジオやセミナリオなどの学校では、信徒子弟への体的な教育が行われ、セミナリオでは絵画教育も行われていた。ヨーロッパ絵画の主題や技術が、主に聖画や銅版画を中心に教授されたらしく、この屏風も、キリスト教の布教効果をあげるべく、洋画教育を施された日本人によって描かれたものであろう。港の見える丘陵で音楽を楽しみ、読書や雑談をする洋人の光景を描いたもので、羊のいる樹木、愛の神殿、城郭などは、いずれも西洋中世銅版画に描かれた題材である。日本の顔料を胡桃油(くるみあぶら)か荏油(えのあぶら)に溶いて油絵効果出し、以前の日本画には見られない陰影ある立体表現など、外来技法習得跡が見られ、日本画史上特異な画風として注目される。(MOA美術館・箱根美術館 名作美術品カレンダーより)

《目次》

代表挨拶	.....	4
感謝奉告①	.....	10
感謝奉告②	.....	11
聖地NOW	.....	12
一〇月度聖地行事	.....	14
箱根	.....	14
熱海	.....	15
京都	.....	16
感謝奉告③	.....	17
感謝奉告④	.....	18
感謝奉告⑤	.....	19
シリーズ明主様(8)	.....	21
新連載「21世紀を生きる」(13)	.....	23
シリーズ《幸せの種まき》(4)	.....	26

令和5年 課題

われよしの 心浄(きよ)めて ひとよかれと  
祈る心は 神に通へる

〱明主様の示された「道」を求め、まっすぐ歩む〱

## 代表挨拶

西村 正資

好<sup>この</sup>もしき 秋<sup>あき</sup>とはなりぬ野<sup>の</sup>や山<sup>やま</sup>の

自然<sup>しぜん</sup>に親<sup>した</sup>しむたのしさおもふ

(昭和二八年一〇月二五日 明主様詠)

我が家を取り巻くミカン畑は、いつしか黄色の実が色濃く存在感を表し、季節の移り変わりの早さを実感しております。富士山初冠雪のニュースが聞こえ、気付けば朝晩の冷え込みも感じるようになりました。皆様は、いかがお過ごしでしょうか。

一〇月一日、箱根神仙郷では『秋の芸術祭』、熱海瑞雲郷では『秋季大祭』が厳粛に執り行われました。

熱海の大祭には、ブラジル、タイ、アンゴラ、アメリカ、スリランカ等、一六ヶ国から二八六名の参拝者を含め、全国から多くの皆様にご参拝になりました。

当会関係者も六二名がご参拝になり、み教え拝読や信仰実践に、一途にお努めになっていらっしやる、その様子や許されたご守護への喜びの報告を、多くの方からお聞きし、大きな喜びを共にさせていただきました。

そして、来たる『明主様御生誕祭』に向けて、さらなる精進を、共々にお誓いさせていただきました。

さて、今号も「道」九月号に掲載された皆様の感謝奉告に、学ばせていただきます。

## 『道』九月号、感謝奉告に学ぶ

田川布教所のTKさんのご奉告です。

昨年末から次々と発生した浄化と、その後の営みや学びを整理されました。脳梗塞を発症して一三年目の夫君に、突然激しい腰痛、後にその原因が骨折であると判明するも、さらにその後の精密検査で、肺に腫瘍が見つかり、胃にも疑わしい影が認められ、いくつもの病院を転々とさせられ、しまいには医師から「癌が骨に転移し、骨折を招いたのでは」と言われ、一気に人生が地獄に転げ

落ちたようなショックで、頭は真っ白、泣きながら帰宅されたそうです。

時の流れには、四季があるようにリズムがあります。私たちの人生、そして運命にもリズムの存在を感じます。T家にとって今年は、大きな転換期を迎えられたということではないでしょうか。

その後、布教所に参拝され、「神様にお任せ。心配しないこと。執着になるから」と教えられました。

そこで、み教えの基本の一つで、拝読を怠り忘れていたことに気付かれています。改めて、明主様中心の生活を決意し、み教え拝読、聖地への祈願依頼、布教所への日参を始め、ご奉仕や浄霊にと、今まで以上の実践を始められました。

その後も紆余曲折ありましたが、厳しい中をようやく乗り越えつつある頃、聖地祖霊大祭参拝に「感謝をご奉告し、力をいただきましょう」と誘われ、迷ったようですが、夫君の賛同もあり、三〇年ぶりにまず箱根神仙郷へ参拝しました。何とも言えない気持ち良さで嬉しさで涙が出そうになったと奉告されています。二日目に熱海瑞雲郷にご参拝、そこでもパワーとオーラを感じ、先祖が喜ばれているのを感じ取られています。

今回の一連の浄化を通して「明主様を求めることの大切さを私に教えてくれた主人に感謝」と奉告され「主人の浄化と思っていたが、私の浄化だったのかも」と、覚っていたらっしやいます。

家族、特に夫婦は、運命共同の存在です。共同ということは、それぞれの役割分担があるのですね。表裏一体、陰陽の役割があります。もしかしたら今回のことは、夫は一家を代表して、重い荷物を背負い、妻が「身軽」になって先頭に立ち、明主様のお力をお借りして「一家の向上への道筋（運命）を新たに切り拓く」ということだったのではないのでしょうか。

また、ここでは、あまり記されてはいませんが、今回の浄化のすべてに、「まず、布教所参拝を通して、大神様、明主様にご奉告させていただく」その後、救急車や病院にと、順序が「神様、明主様から」と、正しく整えられており、そこでいただく助言や耳に入る一言に、とても素直に反応されています。そうした中で、光の道筋が整えられていったように感じます。

とても大切なことですね。夫君は、様々な症状を快癒されて、九月四日に無事退院されました。この度の一連の浄化を通して、自分が気付いたこと、忘れてはならぬ大切なことを、一度メモに書き表してみたいかがでしようか。きっと、今後も大切な幸せへの道しるべとなることでしょう。

田川布教所のKNさんのご奉告です。

今年五月初旬、徳之島に嫁いでいる娘さんから、「つわりがひどくて入院し、三歳の孫もいるので来てくれな

しかし、つわりの回復が遅れ、田川を離れて長くなる  
と、焦りの思いが強くなり、布教所に連絡した時に、助  
言を受け「明主様にお任せしよう」と切り替えていらつ  
しゃいます。

その後、お孫さんが「ばあば、散歩に行こう」と誘われ  
連れて行かれたのが、娘さんの嫁ぎ先のお墓で、そこで  
遊び、ハイキングの時のようにお食事をしたそうです。

Kさんは、自然にお墓に善言讃詞をあげていました。

私には、娘さんの嫁ぎ先のご先祖が、明主様の光を求  
め、子供（三歳の孫）を使つて神様に結ばれる一連の流  
れをつくり、霊界の順序と道筋を整えられたのではない  
かと思えました。

六月末に、ようやく田川に帰られたようですが、その  
直後、布教所でのご奉仕の場で、八月の聖地に於ける  
『祖霊大祭』が話題となり、互いにご参拝を誘い合うこ  
とで、一一名の仲間と参拝されることになりました。

乗り物に弱く、道中を心配していた方も元気で、ご参  
拝が許され、ご奉仕もできたそうです。赤絨毯の部屋を  
掃除している時、昔自分を世話してくださった、今は亡  
き先生が、なぜか懐かしく鮮明に思い出され、喜びと充  
実感を味わいつつ、お帰りになったというご奉告でした。

霊界では、ご先祖様は、共に明主様のおひかりに浴し  
たいとの思いだったのではないのでしょうか。それは勿論、  
ご自分たちが救われたいという思いもあるでしょう。し  
かし、ご先祖様が救われ、力をもたれることは、同時に

子孫や縁（ゆかり）の人々への守護の力も増すというこ  
とで、これも表裏一体で、共に栄える道となるのです。  
また、そうした流れの発端となる最初の一步は、やはり  
生きている私たちが決意し行動を起こさなければならな  
いようです。

この度の聖地参拝も一一名の参拝者だけでなく、霊的  
には数え切れない縁の多くの魂を、聖地にご案内された  
のではないのでしょうか。これも良きご用であり、供養と  
いうことです。良かったですね。

Kさんのことを、「自分が幸せになりたいと求める信  
仰」から、「皆のお役に立ち、捧げられる人間に成長し  
て欲しい」と祈っていらつしやつた亡き恩師が、嬉しく  
て励ましの思いもあり、お姿を見せてくださったものでは  
ないのでしょうか。今日ある自分は、多くの方々の祈りと  
導きのお蔭であることを忘れてはなりませんね。

先達に感謝し、共々に前進させていただきましよう。

鳴門グループのMAさんのご奉告です。

MAさんは、今年当会に入会された方です。しかし、  
入会直後から、派遣切り、ぎっくり腰、発熱と次々ご浄  
化が表れたようです。

こうしたことは、ベテランの信者さんは、よく経験さ  
れていることではないでしょうか。神様から新しいご用  
をいただく時には、様々な浄化をして浄められ、信仰的  
に鍛えられたりすることが多々あります。私自身も、過

去転勤や大切なご用を命じられた時、出先で意識を失い倒れるような浄化をしたり、家を長期間空けなければならぬ大切な時に、子供たちが次々と寝込んだり等というような経験は、数え切れません。振り返ると、その経験こそが、明主様信仰の核心、つまり「明主様がすべてをなさっていらつしやる。自分のことは忘れて、お任せして間違いはない」との信仰を、強固に磨かれた時であつたと記憶しております。

つまり、尊い新たな神様のお手伝いをさせていただく時には、身も心も（霊体）一新させられ、禊みそぎを受けるのだと、私は受け止めております。

何ごとも無いというのは、一見平穩無事で良さそうに思いがちですが、成長や発展も無いということ、大きな流れからすると後退の兆しなのかもしれません。

MAさんも、「止まっていた大神様、明主様のお働きが動き出したように思いました」と奉告されていきます。

流石ですね。そして「自分が救われたいと思い、聖地直結の会に入会したのですが、実は人をお救いするご用にお使いいただくために入会したのだと、次のステップに導かれたのだと気付かせていただきました。心が笑顔になれた」と、奉告されています。

これは、凄い人格の成長です。第二の人生の幕開け。本来の人生の使命に目覚めたとは思いませんか。「私を助けて下さい」という人ばかりが世界中に溢れると、地獄世界となります。ですから、そのレベルから「我も良

し、他人も良し」「へ、そして「無私、無欲」とまではなかなか出来ませんが、せめて「他人も良し、吾も良し」というレベルまでには向上したいものです。

「他人様ひとさまのお役に立ちたい」という人が増えないと、世界に天国は生まれません。さて、どちらの一員になるのか。どちらに所属するかを、自分で決めるのです。

「神様は人の手を通してこの世の天国づくりをおはかりになる」と、み教えにあります。神様が願っていらつしやるのは、難しいことではなく、そのような「愛に溢れる人を、一人でも多く生み出すこと」と、明主様は、本教を拓かれました。

自分の心の構えが変わると、周囲も変わるようです。それまで家族間の浄霊が出来なかったのが、お盆前から許されるようになり、「父はご浄霊後、感謝箱に献金するようになりました」と。想念が変わると自分を取り巻く霊界が変わり、周囲の方も影響を受けるでしょう。その入口は「自分の心」からなのです。

先生から「私たちは、どのような立場にあらうとも明主様のお道具です」と導かれた言葉を大切にされているようですが、まさにその通りです。「道具」は、何時、どこで、誰に、どのような使われ方をするか分かりません。

ですから、普段から「み教え拝読」や「ご浄霊のお取次」等を通して一層の磨きをかけ、使ってくれる人を選ばず「自我を抜く」ことに努めることが大事ですね。今後、周囲に起きてくることを、明主様からのご用命の現場、道

具としての活躍の現場と心がけていけば、ますます光輝く自分に成長することでしょう。

### 淡路グループのNAさんのご奉告です

NAさんは、年四回の聖地参拝が、信仰のモチベーションになっていくそうです。八月一日の聖地祖霊大祭に参拝しようと、いつもより余裕をもって早く夜間に車で出発をしました。高速道路を走っていたところ、強烈な睡眠に襲われ、危険を感じ、サービスイリアに入りました。しかし、何故か車の姿勢に違和感を覚え、降りて確認したところ、なんと右前輪の空気が無いことに気付きます。時速百kmの走行で前輪がパンクすると、多くの場合、車は制御を失い、大きな事故になることがあります。スペアタイヤに交換したものの、長時間の高速走行は出来ず、結局引き返し、無事帰宅されました。

帰路についても多くの見守りのあったことを感じ、整理されています。

楽しみであった聖地参拝を、諦めねばならない無念さは残ったと思いますが、明主様のところに伺う時であったからこそ、ご先祖様もいつも以上に同行され、様々な角度からの守りであったと受け止めて良いのではないのでしょうか。「現世における事象は、その前に必ず霊界で先に発生する。だから守護霊がいち早くそれを知り、子孫を守るため、知らせ、ご守護いただくのだ」と、『霊主体従の法則』として教えていただいています。

NAさんは、この度のご守護を通して「日々離れて暮らす家族への遠隔浄霊、声を出してのみ教え拝読、自己浄霊、そして聖地へのご参拝と基本的実践をさせていただくことの大切さを、改めて実感した」と奉告されています。

私は、NAさんが今日まで、どのような信仰を積み上げて来られたのかは、よく分かりませんが、こうしたご守護を聞かせていただくと、今日に至るまでの人生の歩みや信仰の営みに対し、ご先祖様から大きな感謝を受け、信用があり、なお今後への期待もあり、かけがえのない存在なのではないかと想像します。

人間世界の信用や感謝は、一時的であったり、我欲によって創造された虚偽であることもあります。しかし、霊界は誤魔化しができません。善か悪か。瞬時に識別され、それが本人のみならず家族や先祖にまで運命の影響を及ぼすことになるそうです。

これから、体力回復に努められ、見えない世界からの期待に大いにお応えください。

また、現界人の務めとして、乗り物を使用される時の点検や安全運転を、しっかりと心がけてください。

次の聖地参拝をお待ち致しております。

私ごとになりますが、先日「後期高齢者」入りの誕生日を迎えました。家族から祝福を受け、今日までの歩みを振り返り、一人感慨にふけておりました。



その時、なぜか明主様のお声を感じました。「お前は、人生最後の瞬間まで、他人様へ尽くしきる覚悟だな」と。//さてさて、明主様は厳しいな！”と、独り言を言いつつ就寝しました。

最近、”明主様は厳しいのではなく、大愛なのだ”と、私の間違った想念を正されるようなニュースが耳に入りました。

中国杭州で開催されていた「アジア競技大会」、ローラースケート三千m男子リレー決勝で、トップの韓国チームが勝利の金メダルを確信し、ゴール直前でスピードを緩め派手にガッツポーズ。その間に二位で追って来た台湾選手が、片足を延ばしゴールラインを通過、僅か千分の一秒の差で逆転優勝をしました。

韓国チームは、最後の一瞬の気の緩みから、金メダルと褒賞の兵役免除を逃し、天国から奈落の底へ。

私には、他人ごとのように思えませんでした。

私たちの今年のゴールは、『明主様御生誕祭』です。

最後の瞬間まで、他人良かれの誠を基本に、明主様、ご先祖様の期待に、皆様と共に応えさせていただきたいと思えます。

皆様のご活躍を、聖地にてお祈り申し上げます。

## 12月23日 御生誕祭全国信徒集会のご案内

今年賜りました数々のご守護に御礼のご奉告と来る新たな年の目標、並びにその達成祈願を併せて執り行わせていただきます。会員の皆様におかれましては、万障お繰り上げの上、熱海聖地における御生誕祭にご参拝くださいませ。

なお、祭典終了後、執務棟会議室におきまして「聖地直結の会全国信徒集会」を開催いたします。所要時間は約30分を予定しています。ご参拝の皆様におかれましては、是非ご参加くださいますよう、併せてご案内を申し上げます。

## 感謝奉告 ①

### 私の祈りに明主様のお働きが

熱海グループ KH

私は、卒寿を超えましたが、お蔭様で元気に生活ができています。この度、家庭内での浄霊体験をご奉告させていただきます。

今年の九月初め頃から、息子の右脚が腫れ、痛みも生じてきました。そのため、九月一三日に近くの整形外科を受診しました。検査の結果、医師から「膝に水が溜まっているので、ヒアルロンサンの注射をするか、膝の水を抜く治療があります。また脚のサポーターも勧めます。しばらく様子をみましょう」と言われましたので、サポーターだけを薬局で購入し、ひとまず帰宅しました。そして、九月一五日に再度整形外科を訪れ、脚に電気をかける治療だけは受けましたが、その後、脚の腫れは進み、特に膝の腫れはひどくなり、膝から下はパンパンに腫れてきました。

医師の診断は受けましたが、母親として子供の健康、幸せのためには「ご浄霊をお取り次ぎするしかない」との気持が、何故か不思議にも湧いてきました。早速息子

に「お母さんがご浄霊しようか?」と言いますと、素直に「お願いします」との返事でした。直ちにソファアに座り、ご浄霊のお取り次ぎを始めました。心の中で「明主様、息子の足を治してください」と、お願いしました。「浄霊は、明主様のお力である」と教えられていますが、不遜なことに「絶対治す。治るまで取り次ぐ」という強い気持の私でした。

一時間ご浄霊をお取り次ぎした後、息子に「どう?」と聞くと「何となく良いかな」との返事でした。その言葉を聞き、とても嬉しい気持になりました。その日から、三〇分から一時間程度、毎日ご浄霊をお取り次ぎしました。息子は、勤めから帰った後、素直に浄霊を受けてくれました。息子が、母親を頼りとする姿に、家事の疲れも忘れ、お取り次ぎに集中しました。ご浄霊のお取り次ぎが毎日の楽しみとなり、生き甲斐でもありました。

息子は、浄霊の度に、「気持が良い」と言います。お蔭様で、数日で随分腫れが引き、「不思議だね、おかしいね、良くなってきたよ」と笑顔で応えてくれました。少しずつ良くなってきた様子は「明らかにご浄霊のご守護だ」と、感謝せずにはおられませんでした。

九月二二日に再び整形外科を訪問。医師からは、「膝の水は無くなってきているし、随分腫れも引いた。何故か不思議に良くなっています。これなら二週間来なくて良いです」と言われ、診断内容にも安堵しましたが、心の中では「明主様のご浄霊のご守護」と思っていました。

その後も、毎日ご浄霊のお取り次ぎに励みました。

九月二六日には、腫れも痛みも、むくみも取れて、夜も熟睡できるまでにご守護いただきました。明主様に心から感謝を申し上げます。

この度の息子の浄化を通して、「真剣にお祈りすれば、明主様は、私にもお働き下さる」という貴重な体験が許されました。これからもご浄霊に取り組んでまいります。

## 感謝奉告 ②

### 感謝の実践が信仰継承に

大阪グループ N M

先般、「道」58号に掲載されました、友人の子息の感謝箱に取り組みられている姿に感動した感謝奉告の第二弾をお伝えします。

その日、私は布教所行事の案内で、友人のNTさんに連絡をしたところ、NTさんから、お孫さんについて報告がありました。

その内容は「道」58号に掲載された、NTさんが、日々コツコツ感謝献金されている姿を、お孫さんが見ていて

「私も」と自主的に取り組まれていた、というものでした。そして「今度、高校に進学するので、一つの区切りとして、今日まで溜まった分を献金してください」と、託されたのだそうです。

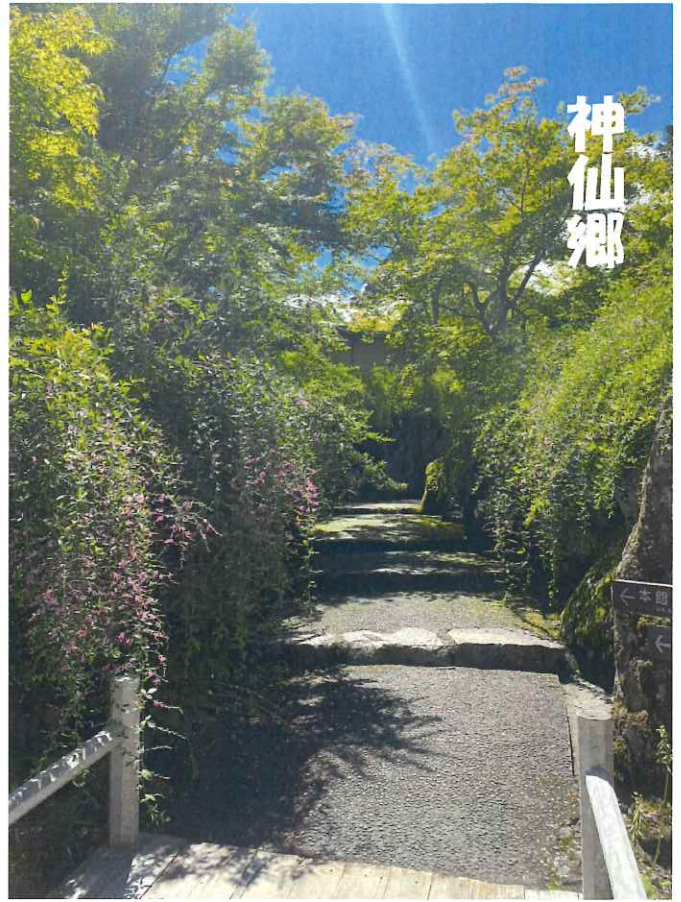
NTさんがおっしゃるには「金種は、ほとんど1円玉ですが、それでもいいですか」ということでした。それを聞いて私は「金種なんか問題ではありません。コツコツと献金されるおじいさんの姿をみて、素直に実践されたその心が尊いのです。信仰の継承という素晴らしい結果の表れではないですか。喜んで聖地へお届けさせていただきます」と、お預かりしました。

心は晴れ晴れ、喜びと感謝と共に奉告させていただきます。





## 秋の神域・静と動



箱根美術館の萩の道



ドイツ、ポルトガル参拝団の集合写真



国旗がたなびくロータリー



清掃奉仕に心を込めて



瑞雲郷を散策するモザンビーク参拝団



建設が進む紫微宮



山月庵に続くお庭の飛び石



聖地NOW



平安郷

静寂に佇む竹林



アフリカ参拝団



聖地直結の会の参拝者



続々と平安郷に集う信徒



芒(ススキ)



秋桜(コスモス)

信仰と芸術の融合を図る神仙郷「秋の芸術祭」



根本霊地の箱根聖地。光明神殿に轟く善言讃詞の言霊



九〇〇本のトルコキキョウが、秋の芸術祭に彩りを添えた

本教救いの三本柱である『浄霊、自然農法、芸術』。神仙郷「秋の芸術祭」では、明主様の示された美による救いと文明の創造との関係について言及された。利他の精神が、作家の魂から芸術作品を通じて触れる人々の魂に伝わり、情操を高めていくように、芸術による新しい価値観の創生と人としての生き方についても掘り下げられた。

国際色豊かに賑々しく斎行された瑞雲郷「秋季大祭」



凜とした祝詞が救世神殿に響き渡り、参拝者の祈りを集中させる



参拝者は明主様の人類救済、地上天国建設の御神業に誓いを捧げた

穏やかな晴天に恵まれた瑞雲郷秋季大祭の朝は、海外16の国と地域から訪れた信徒の賑々しい雰囲気にも包まれた。救世会館3階参拝席中央に位置した300人近くの信徒は、祭典開幕前、同時通訳器のテストに挙手で応える以外は、波を打ったように静粛だった。真摯な信仰姿勢を垣間見た国内信徒に、新風をもたらすみ祭りとなった。

春秋庵で初めて斎行された平安郷「秋季大祭」



おおみろく様の御前で、初の秋季大祭を寿ぐ祝詞が奏上された



想念を整え、静粛に祭典に臨む海外信徒

秋晴れの青空の下、平安郷春秋庵において初めての秋季大祭が執り行われた。箱根光明神殿、熱海救世神殿とも異なる座拝による祭式、祭員の所作からも、訪れた海外信徒はじめ国内の参拝者も、特別な空気に満たされて祭典に臨んだ。そして、古都ならではの日本庭園、秋の草花、竹林のたたずまい……。芸術の秋にふさわしい祭典が繰り広げられた。



## 感謝奉告 ③

### 伝えて良かった “感謝箱”

大阪グループ KM

三年前、娘の一番下の女の子が中学校に入学した時でした。娘が子供に感謝箱を渡し「これからいろんな友達に出会うでしょう。会った時に、感謝を表せることができたなら、皆から好かれるのよ。良いことがあったら、いくらでもいいから感謝箱に気持ちを込めて献金したら、感謝の習慣が身につくと思うわ」と伝えました。

するとその孫娘は、夜休む前に「ありがとう、おやすみなさい」と言うようになりました。しばらくして「明日もお願いします。今日もありがとう」と言うようになり、それを聞いて成長したのかなと、娘が喜んでいました。

娘が子供の成長を「元気に、優しく、素直に、神様のことを分かったらいいな」と願っていたようですが、感謝の気持ちを感謝箱に捧げていくことでその成長を感じているようです。

今年の九月、法事で娘家族と会う機会がありました。孫娘に会うと、



中学三年間、感謝箱の取り組みを、ずっと続けていたようです。そして、「お届けしてください」と感謝箱の中のお金を渡されました。三年間の感謝献金は、ほとんどが一円玉のように見えました。そこに込められた孫娘の思いは、何にも勝る宝のように思えて、嬉しくなりました。娘も大変嬉しそうで、この度、私たちの祈りも込めて聖地へお届けさせていただきました。

孫娘は「高校に入学してからも続ける」と、今も実行しています。

娘は「始めは、何気なく伝えたことだけど、心を込めてしっかり伝えることが、如何に大切なことなのか」勉強になった」と、喜びの声をあげていました。

私たちも、娘家族の成長が嬉しくて、心より大神様、明主様に感謝申し上げます。ありがとうございました。



## 感謝奉告 ④

### 救われる側から救う側へ

古賀集会所 H A

私は今年5月に、神戸須磨集会所で開催された「助師資格検定研修会」への参加を許されました。その時の感想や気付、学んだことを書かせていただきます。

私が最初にこの研修会のお話を先生からいただいた時は「何故自分なんだろうか、自分にその資格があるのだろうか？」と不安と疑問ばかり浮かんできました。そうした思いを拭えぬまま、研修会の朝を迎えました。

当日は、同じ古賀集会所のHさんと二人で会場に向かいました。早朝、新幹線に乗り込み、新幹線から在来線へ乗り換え、電車を降りた後は海の見える道を歩きました。二人で集会所を探していると、散歩中の年輩の男性が道案内をしてくれました。不安な気持を抱きながら集会所の扉を開けると、西村代表をはじめ、大勢の方々が、温かい笑顔で迎えてくださいました。それと同時に、不安な気持は無くなりました。

各地から参加者が集まってきて、研修会が始まりました。入所参拝、ご浄霊、代表からのご挨拶をいただきました。

した。その後、須磨海水浴場の清掃奉仕へ全員で向かいました。砂浜はとても暑く、体中から汗が吹き出てきましたが、同時に「ここに来られる方のために綺麗にさせてもらおう」という気持も湧いてきて、夢中でゴミを拾いました。

その後、集会所に戻り、少し休憩をとった後、座談会があり、参加者各々の入信動機や信仰、浄霊に関する体験や考え方を伺うことで、私が今後、信仰を続けていく上で参考にすべきことや、今まで気付かなかったことなど、多くのことを学ばせていただきました。座談会の中で、特に印象に残っている言葉が二つあります。

一つは「その人が救うべき人を、神様はご用意くださる」ということ。もう一つは「神様に認められた人じゃないと、必ず何かの邪魔が入り、この研修会には来れない」ということでした。

私は長年、多額の借金に苦しめられていました。世界救世教への入信を許された後、数多くの奇蹟を授かり、無事に完済することが出来ました。今後は、自分と同じ境遇にある方々を助けたいと思っています。今回の研修会への参加と、先生のお話を伺ってから、自分の思いは願望ではなく「使命」なんだと思うようになりました。まだまだ未熟な自分ではありますが、明主様のみ許に集められた一員として、救われる側から救う側の人として相応しくなれるように、より日々精進していく覚悟です。

## 感謝奉告 ⑤

### 自然農法のご用こそ我が道

鳴門グループ OK

今年の五月、メシア教から「世界救世教 明主様と聖地に直結する会」へ入会させていただきました。

最初は、明主様を求めていれば、どの団体に所属していてもいいのではないかと思っておりました。しかし、メシア教で熱心にご利用されていた和田先生が、なぜ、「聖地直結の会」に行かれたのか、話を伺っているうちに「やはり私もそうだ」と思うようになりました。

それから、約四ヶ月が経ち、色々な気付があります。

現在、住んでいる私の家のことです。我が家は阪神淡路大震災で被災し、建て直したのですが、建て直す際、母は「将来、この家を明主様のご用の場に使うて欲しい」と願って、ご神前までの間取りを、店舗から直接上がれるように設計していました。まさか、このタイミングで我が家を鳴門グループの拠点としてお使いいただけとは思ってありませんでしたが、母の長年の夢が思わぬ形で叶ったことには驚きです。母は、このことに大変喜んでおります。そして、毎月、鳴門グループの感謝奉告

祭も執り行わせていただけるようになりました。

次は、営んでいる種苗店のことです。昨今、作付面積の減少や、後継者不足による農業離れの関係から、常に資金繰りに悩まされてきました。その度に、赴任される先生方に相談をしてきましたが、根本的な解決には至りませんでした。先生から、「Oさん、世界救世教は、救いの三本柱ですよ。Oさんには、うってつけの自然農法があるじゃないですか」と言われましたが、私は、何から手をつければいいのか分からないまま悩んでおりました。また、先生から「現在、我が国では、地球温暖化や自然環境破壊といった人類の危機を乗り越えるべく、令和四年四月、環境と調和のとれた食料システム確立のため『みどりの食糧システム法』が制定されました。国家を挙げて有機農業普及を本格化させる中であって、農林水産省の推進事業として、私も世界救世教の自然農法が推奨されていますよ。今こそ、自然農法産の種や苗を必要とされる時代が来ましたよ」と言われ、一つ一つ丁寧に教えていただきました。

「善は急げ」と思い、政治家、野菜のバイヤーにお声をかけさせていただきました。九月二三日には、県議会議員にお会いすることができ、自然農法産の種や苗の普及の提案をすることができました。県議会議員の方も「良い提案をいただいた」と前向きに受け止めていただきました。先生に背中を押していただいたことで、明主様の救いの三本柱のひとつである自然農法に参画させていた

だくことができました。これから徳島県を、全国に先駆けて自然農法普及先進県として、皆様と力を合わせて歩んでまいりたいと思っております。

先生が、自然農法クラブというライングループを作ってください、徳島県内の農業従事者、家庭菜園実施者で構成する信徒十数名が参加しています。日々の情報交換や意見交換の場として、これから周囲の方や政治家、行政も巻き込んで、自然農法普及の運動を展開していくことができければ、と思っております。

今までの私は、信仰面、商売面、生活面などで、憤りを感じておりましたが、この四ヶ月で「今までにないことが始まっているな」と感じるようになりました。その中で一番大きな気付は、明主様に出会い、数十年が経過し、様々な浄化をいただきましたが、その度ごとにご守護をいただけてまいりました。今までの私は、ご守護をいただけることで満足しておりましたが、今では、その先があると思えるようになりました。いつも先生が、「善悪を超えた世界がありますよ」とよく言われますが、その段階にようやく進めたのかなと思えるようになりました。九月号「道」の巻末に、高頭和生氏紹介の田坂広志氏著書『人類の未来を語る』の中で、弁証法という、相反する二つの命題に対して、対立させるのではなく、より高い次元で融合するという考え方も、「善悪を超えた世界がありますよ」と同じなのだと思います。全ての思いが明主様の思いの現われと受け止めさせていただ

いて、日々生活しています。

明主様ありがとうございます。



収穫した自然農法産作物を持ち寄り、ひと味違う遊び心で造形を楽しむ

## シリーズ 明主様(8) “実業の道”

### 結婚

光琳堂こうりんどうは、無経験から始めた商売であり、先行きのことはまったくわからなかった。けれども母の助けを借りながら、正直流をモットーにして一生懸命商売に励んだので、しだいに繁盛して、店はいつの間にか手狭てせまになってきた。そこで、半年もたたないその年の十一月、同じ通りのすぐ目と鼻の先にあたる南榎町一七番地みなえちよう（現在、中央区京橋一丁目五番地）に光琳堂より大きな家を借り、住まいと店とを別々にし、腰を落ち着けて商売に没頭ぼつとうできるとしたのであった。教祖の「改製原戸籍かいせいげんこせき」には、南榎町一七番地に存在するものとして、冒頭ぼうとう（ぼうとう）につぎのような記事が記載されている。

「東京市京橋区築地式丁目式拾七番地しゅうしち

戸主 岡田武次郎弟 分家届出

明治参拾八年拾壹月式拾五日受附」

光琳堂の仕事も軌道きどうに乗り、独り立ちの自信のついた教祖は、分家し、ここに戸主として一家を構えることになったことが、この記録ではっきりわかる。

取り扱う商品の多くは女性が身につけるものである。正直をモットーに仕事に精を出す教祖の人柄は、店に出

入りする客に好感を与えずにはおかなかった。まして年頃で独身である。そろそろ身を固かためては、と気をもんでくれる人もあった。そんな話の一つに浅草の大きな製粉業者から、

「ぜひうちの娘の婿むこになってもらいたい。」という話があった。これは、教祖がいい耳だったので、大きな耳の人には福運があるというわけで、そこを見込まれての縁談であった。

しかし教祖は、「自分は養子には行かない。一本立ちになって、一家を成し何かをやる。」と言って、その縁談をきっぱり断ったので、仲に立った親類ががっかりしたということもあった。そのうち高橋源太郎が自分の親類筋にあたる相原タカとの縁談を持ってきたのである。

タカの実家は神奈川県久良岐郡寺前村くらきぐんてらまえむら（現在の横浜市磯子区金沢寺前町いそこくかなざわてらまえちよう）にあり、父の房吉は若いころ力士りきしをしていたことがあったが、このころは米屋を営んでいた。

教祖の母・登里もこの娘が気に入り、嫁に迎えることとなった。高橋源太郎が媒酌人ばいしやくにんをつとめ、父の三周忌しゅうきをすませた明治四〇年（一九〇七年）六月にめでたく式をあげた。時に教祖二四歳、タカ一九歳であった。

タカは五歳から六歳まで二年の間親もとを離れて、養女に出されたこともあって、負けん気なしっかり者であった。米屋の次女として生まれ育ったから、商家の女としてのつとめを、頭でなく体で覚えこんでおり、商売上の取り引きから、店員の扱いまで、男に負けないものを持つ

ていた。このことは教祖のもとに嫁いでも大いに生かされた。仕事の手際が良く、いつも何かしていないではいられない働き者であった。家事から店の仕事まで、何人分もの活躍をし、その忙しさの中から暇をつくりだしてはお花やお茶を習っていた。店の拡張とともに店員がふえてからでも、店員の洗濯物を洗ってやるほどの面倒見の良さで、みな信頼も厚かった。手元に置くより安心だからと店員たちが預金通帳を持って来て、「お内儀さん、これを預かっておいてください。」と言う。するとタカは、億劫がらずに受け取って金庫に入れてやるのだった。教祖の店が創業以来、わずか一〇年にして、小間物の製造及び卸問屋として大きく飛躍することができたのは、こうしたタカの内助の功に負う点もまた多大なものがあった。

### 卸問屋「岡田商店」 商いの拡張

小間物小売商・光琳堂を始めてから約一年半、教祖は明治四十年（一九〇七年）二月に、京橋区南横町の自宅を店に改め、ここで問屋商売をすることにした。光琳堂の時は化粧品も、装身具類も商っていたが、今度は装身具だけに限った卸問屋……「鼈甲・金属装身具 卸商 岡田商店」として発足したのであった。

ズブの素人から始めた光琳堂は、確かに順調に発展し、繁盛していたので、小売店経営について、教祖は多少の

自信を得たかもしれない。しかし、なんといつてもまだ二年足らずしかたっていないし、そのうえ、今度は小売りではなく卸問屋である。これは大変な、賭けにも等しい冒険というべきであろう。病弱の為、消極的、慎重な性格の教祖が、普通の人なら敬遠するような、この勝負に挑んだのはよほどの成算があつてのことに違いない。

教祖はかつて、「実業之日本」誌などで読んだ多くの実業家の成功談を思い浮かべながら、自分だけつして小商人では終わらぬ、きつと大成してみせる……と、強く思い、小間物商を営む間にも、いろいろとその計画を練ったことであろう。そして、「よし、これなら大丈夫」という勝算があつたからこそ、一見無謀にもみえる卸問屋開業に踏み切つたに違いないのである。その勝算の内容について、教祖自身の記述はまづたく残っていないが、少なくともつぎの三点が考えられる。

その一つは、問屋ともなれば、元手はもちろん、相当な運転資金の必要なことはいまでもない。その金額の見通しがあつたこと。二つには、父・喜三郎から受けた日ごろの指導を主にし、今まで身に付けてきた鋭い美的感覚によつて、何が女性の装身具としてふさわしいか、それを見抜く目に自信があつたこと、そして三つ目は、木村金三という、まさに打つてつけの協力者を得たことであつた。

## 新連載『21世紀を生きる』（13）

### 「人類の未来を語る」②

高頭 和生

前回は、田坂広志氏著の最新本『人類の未来を語る』（光文社）を通して、いづのめの思想が現代のさまざまな問題を解決する大切な思考法であることを学びました。著者は、弁証法を取り上げ、「相反する命題（異質なもの）が、対立するのではなく、より高い次元で融合する思考法」が、科学や技術、政治や行政、経済や経営、医療や福祉、教育や文化といったすべての分野において実現してゆくべきとあります。また、これからの人類社会が直面する数々の危機、地球温暖化、環境破壊、資源枯渇、エネルギー危機、水資源不足、食料危機などの解決のために、「自己主義」と「利他主義」を対立させず融合させ「合理的利他主義」という思考を持ち、「未来の世代の利益を大切にすることが、現在の世代の利益になる」という考え型が必要であるという内容でした。

今回は、著書のテーマのひとつでもある、「『宗教』と『科学』の融合」を中心に進めていきます。

著書では、『対立物の総合浸透の法則』すなわち「対立し、競い合っているもの同士は、互いに相手の主張しているものを取り入れ、融合していく」という法則に従うと、『宗教』と『科学』は近未来には融合すると結論付けています。

歴史を振り返ると、宗教がイデオロギーの中心で科学が迷信であった時代がありました。一七世紀に地動説を説いたガレリオは「宗教の敵」とみなされ弾圧されました。『ガレリオ裁判』です。しかし現代は、学校教育で科学を学び、多くのひとが科学的認識を正しいものと考えています。「宗教が、科学の『合理主義』を取り入れていく動きの時代」から、「科学が宗教の『神秘主義』の領域に踏み込んでいく働きの時代」になってきました。本シリーズ⑦、⑧の中で学んだように、宇宙科学をはじめ、現代科学の最先端の理論は、極めて神秘的な宗教的世界観を持ったものになっています。

現代科学の最先端の「インフレーション宇宙論」では、「一三八億年前、この宇宙は存在しなかった。ただそこには、極微の小ささの『量子真空』だけが存在した。次の瞬間に『急激な膨張』を起こし、さらに直後に『大爆発』が起き、この宇宙は、光の速さで膨張を始めた。その結果、一三八億年後の現在、一三八億光年の壮大な広がりを持ち、その中におよそ二〇〇〇億個の銀河が存在し、銀河の中に、二〇〇〇億個の恒星が存在している」となっています。そしてこの宇宙は「光子（フォトン）」

で満たされている」とされています。すなわち、この宇宙は「光で満たされていた」ということです。この最先端科学が語る「創世記」は、キリスト教でいう「神は七日間を使って、この世界を作った」、「神は初めに言った、光あれ。すると光が現れた」という話に不思議な一致がある。と著者は言います。また、仏教の「般若心経」においては、「色即是空、空即是色」とあります。宇宙は「量子真空」から生まれたという科学に対して宗教では、「この世界『色』は『空』から生まれてきた」と語られているのです。著者はこのように、「『古典宗教』と『現代科学』は不思議と一致している」と語ります。宗教というものものの原点が、「世界に対する不思議な感覚」というものであるならば、現代の最先端科学は、人々に最も深遠な「世界に対する不思議な感覚」を与えるものに他ならない。故に、宗教は科学の持つ「合理主義」と「論理性」を受け入れ、科学は宗教の持つ「神秘主義」と「不思議」の世界に踏み入り、「宗教」と「科学」が融合してゆくと予見されます。さらに興味深いのは「一神教」的宗教システムが、「多神教」的宗教システムへと原点回帰してゆくとあります。弁証法の『螺旋的發展』の法則です。古い宗教の姿が新たな形で復活してくるのです。

人類の歴史を振り返るならば、最も原始的な宗教は「世界のすべてに神や靈魂が宿る」と考えるアニミズムでした。その後、ギリシャ神話やローマ神話に象徴される「様々な神が存在する」という「多神教」が生まれました。

しかし、その「多神教」が、歴史の流れの中で、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教などの「一神教」に主役の座を受け渡しました。その大きな理由は、「一神教」の教義は、明確な一つの価値観のもとに構築されており、多くの人々を信仰の世界に導くための、一貫性ある洗練された体系をもっていたからです。私は、中央集権の国家を築くためには戒律を持った「一神教」が都合良かったと解釈しています。

しかし、すべての物事において、長所は必ず短所ともなります。「一神教」の宗教は、その明確な価値観と一貫した教義の体系が故に、他の「一神教」の宗教と相容れないという、「排他主義的傾向」を常に抱えています。これが歴史の中で繰り返されてきた宗教同士の争いや、宗教国家同士の戦いの大きな原因でした。

では、この先の近未来において「一神教」に何が起こるのでしょうか。著者は、弁証法に沿って予見すると、「再び『一神教』から『多神教』へ原点回帰が起こる」と言います。それは、「世界中に存在する様々な『一神教』が、互いに相手の教義を否定せず、互いの存在を認め合い、互いに教義の根本部分の共通性に眼を向け、この世界で、共生してゆく」そして「このことによって、この人類社会に、新たな次元での『一神教』の世界が生まれてくる」と書かれています。「一神教」と「多神教」という二項対立を超え、それらが弁証法的（いづのめ的思考）に止揚された「進化した宗教システム」になっていくと、



結論付けています。

これから神についての説明を試みるが、単に神といつても、実は上中下の階級があり、千差万別の役目がある。神道においては八百万あるというが、まったくその通りで、今日まで神といえは、キリスト教的一神教と、神道的多神教のどちらかであった。しかし両方とも偏った見方で、実は独一真神が分霊して多神となるのであるから、一神にして多神であるというのが本当である。これは私が永年の神霊界研究によって得たる結論であつて、この考え方も今日まであるにはあつたがそれ以上は説け得ないようであつた。そうして今日まで最高神として崇められて来た神といえども、実は二流以下の神であつて、最高神は遙か雲の彼方に座し、ただ人類は遠くから礼拝していたに過ぎなかつたのである。では最高神とは何ぞやというと、主神にほかならないのである。エホバ、ロゴス、ジユース、天帝、無極、再臨のキリスト、メシヤ等の御名によつて、各民族各国家の人民が称え来つた神である。主神の御目的は真善美完き理想世界を造るにあるので、それにはすべての条件が具備しなければならぬので、神はその時を待たれ給うたのである。その時とはすなわち現在であつてみれば、人類はこのことをまず認識しなければならぬとともに、自己自身の精神革命こそ喫緊事である。

(「本教の誕生」昭和25年11月20日より)

次回は、「天国は芸術の世界なり」という明主様のみ教えに沿つて、そのヒントになるのではないかと思われる著書の項目、「アートの進化」、「アートとしての人生」を学んでいきたいと思ひます。

この連載は「明主様を求める」ひとつの切り口として紹介しています。会としてみ教え解釈の固定化を図る意図はありません。寛容にお読みいただければ幸いです。

(編集者)

## 北風と太陽

☞自分が魅力的になれば人が集まってくる☀

北風が太陽に向かって、いばりながら、こういいました。

「どうだ。私の力はすごいだろう。あたり一帯に吹くだけで、いろいろな物を吹き飛ばしてしまうんだからね。人も動物も私を恐れて、みな、住みかに隠れてしまうよ」そこへ、ちょうどマントをつけた男が歩いてきたので、太陽はこういいました。

「それなら、私と力くらべをしてみないか。あの男のマントを脱がしたほうが勝ちだ」北風は自信満々で、その挑戦を受け、男のマントを吹き飛ばそうと強い風を吹きつけました。

しかし、男はブルツと震えて、ますますきつくマントを身体に巻きつけました。そのため北風がどんなに頑張っても、男のマントを脱がすことができません。

次は太陽です。

太陽は春の日差しのように男



を照らし、冷えた身体が温まるようになりました。それからすこしずつ日差しを強めていきました。

すると、男は身体がポカポカしてきて、とても気持ちよくなりました。

そして最後には暑くなり、とうとうマントを脱いでしまったのです。

この物語は、「人の心を動かそうとする時に、相手に対して強引に自分の思いを押し通そうとしても、相手は振り向いてくれません。自分が太陽のように温かく相手に接していけば、自分が説得しようとしなくても、相手の方から心を開き、真に伝えたいことを受け入れてくれる」ということを示しています。

明主様は、「稔るほど頭をたれる稲穂かな」とか「人に接するや軟かき春風に吹かれるごとく」とおっしゃっています。私たちは、人を安心させる笑顔と思いやり（愛情）のある接し方で、人に相対していききたいものです。

世界救世教 明主様と聖地に直結する会  
(聖地直結の会)

〒413-0006

熱海市桃山町26-1 救世会館1階

電話 0557 85 8060

FAX 0557 85 8185

seichicyokketsunokai@outlook.jp



No. 65 2023年10月15日発行



葡萄色(えびいろ)の秋